仮面ライダーOOO（アインズ）

無音Ψ無心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダーＯＯＯ（アインズ）

【Ｎコード】
Ｎ７３０１Ｑ

【作者名】
無音Ψ無心

【あらすじ】
アンクが自分のコアメダルを三枚手に入れた――そのころ、それは廻り始めた。
マーモンとアインズ、そして、矢吹翼。
彼らは欲望を巡る戦いに、どんな影響を与えるのか。

現在、長期休載中。

第一話：炎のコンボと欲望と運命（前書き）

なんというか……すみません。

第一話：炎のコンボと欲望と運命

Ψ

「今回だけだ。映司！」

アンクがクジャクのコアメダルを投げつける。
そして、里中エリカがクジャクのカンドロイドをショットガンで射出した。
コンドルのコアメダルを持ったクジャクカンが飛翔する。

「！」

オーズは体をひねり、トラとバッタのコアを抜き出す。
そこにクジャクのコアが入り、オーズはクジャクカンの落としたコンドルのコアを受け取って、オーズドライバーに納めた。
三枚のメダルが赤く光る。
オーズはドライバーを斜めに傾け、オースキャナーを滑らせた。

タカ！　クジャク！　コンドル！

タァージャァァドルゥー！

オーズの全身を炎が包み込み、オーズの姿が赤い鳥を模した＜タジャドルコンボ＞へと変化する。

「はぁぁ」

オーズが腕を開くと、孔雀が如き羽根が展開した。

「うあぁぁ！　は！」

その羽根が無数の火炎弾に変わり、ライオンクラゲヤミーから出たクラゲを破壊する。

「はぁぁぁ、はぁ！」

オーズの背中に赤い翼が現れ、ライオンクラゲヤミーに向かって飛翔した。オーラングサークルから、タジャスピナーが現れる。
ライオンクラゲヤミーが口からはなった炎を、オーズはタジャスピナーで防御し、タジャスピナーから火炎弾を放つ。
オーズは高速飛行で、ライオンクラゲヤミーを翻弄する。

「はぁぁぁぁ！」

オーズが、オースキャナーで三枚のメダルをスキャン。

スキャニング　チャージ！！

コンドルレッグがクロー状に展開し、オーズは空中高くから急降下する。

「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！　ていりゃあぁぁぁ！！」

＜タジャドルコンボ＞の必殺技プロミネンスドロップが決まり、ライオンクラゲヤミーが爆散して、セルメダルが飛び散った。
オーズは翼を納めて、着地する。

「ほほ！　大量だな！」

クレーン　アーム！

バースがクレーンアームで、セルメダルをかき集める。

「う・・・・・・くっ」

オーズの変身が解け、映司は後ろに倒れ込んだ。

「映司くん！」

泉比奈が映司に駆け寄り、そのあとからアンクがゆっくりと映司に近づく。

「映司くん！　映司くん、しっかりして」

比奈が映司の体を揺さぶる。

「大丈夫・・・・・・はあ、はあ」

映司は右手で、三枚の赤いメダルを上に掲げる。
それを、アンクが強引に奪い取った。

「アンク！」

アンクがメダルを投げ上げ、赤い異形の腕で吸収すると、アンクの背中から羽が生えた。
しかし、数秒もたたずに、その羽は砕け散る。

アンクは気が抜けたように手を震わせてから、歩き出した。

「アンク・・・・・・」

比奈がそれを追う。

（コアメダルが増えたのに、どうして他のグリードみたいにならないんだ？　アンクの体は）

オーズの使えるメダル
タカ　２
クジャク　１
コンドル　１
クワガタ　１
バッタ　１
トラ　１
ゴリラ　１
ウナギ　１

Ψ

とある発掘現場。
そこでは、中年の考古学者が一人、発掘を行っていた。

「これは、歴史的大発見だ！　超古代文明の遺産！　やった！　やったぞ！　俺はやったんだ！！」

男は、掘り当てたその空間を見回す。今までに見たことのない洞穴絵画など、未知の遺産で埋め尽くされている。

「あはははは、あはははははは」

男は、石の棺のような物体に目が留まった。その物体の鍵なのだろうか、小さな石版が付いている。その石版には、丸い穴が三つ開いていた。

「なんだ？　これは」

男がその石版を傾けると、突如として地面が揺れ、男は落ちてきた天井に潰された。

――それから、数刻して。

棺の中から、メダルでできたような腕が現れ、石版を棺から外した。その直後、棺の中からメダルでできたような異形の生命が四体、現れた。

Ψ

鴻上ファウンデーションの社長室で、中年の男――鴻神光生がレコードをかけながら、バースデイケーキを作っている。

ハッピ、バースデイ、トゥ、ユー
ハッピ、バースデイ、トゥ、ユー
ハッピ、バースデイ、ディア

鴻上はチョコレートで、文字を書いてから言った。

「マーモン」

ハッピ、バースデイ、トゥ、ユゥゥゥゥ

Ψ

癖のある黒髪の少年――矢吹翼(やぶきつばさ)は、縁(ふち)が金色の白いメダルを指で弾き、手の甲に乗せた。

「表・・・・・・。はは、約束の時ということか」

翼は近くの自動販売機に、セルメダルを投入し、中央のボタンを押した。自動販売機が、ライドベンダーへと変形する。
翼はライドベンダーに跨り、それを目的のいる場所へと走らせる。

「・・・・・・あれか」

翼が向かったのは、とあるビルだった。そのビルは半壊状態で、火を出し、多くの人間が逃げまどっていた。そこには、首が二つある犬のような怪人――オルトロスヤミーがいた。

「約束の時。今日がそうだ！」

オルトロスヤミーが翼に向かってくる。しかし、翼は微動だにしない。

「来い！」

翼が叫んだ、その途端、白い異形の腕が現れ、オルトロスヤミーを弾きとばした。

「何？　あなた、馬鹿なの！？」

驚きを隠せない様子のその腕をよそに、翼はその腕を嬉しそうに見つめる。

「お前が、俺の運命か？」

「あなた、何を言って？」

腕が言うのと同時に、翼は懐から白いメダルを取り出す。

「それは私のコアメダル！！」

「やはりお前か！　俺に力をくれるのは」

「どういうこと！？」

二人が話しているうちに、オルトロスヤミーが立ち上がり、二人に突進を仕掛けてきた。

「やばっ・・・・・・ああもう！　仕方ない！　これを使いなさい！」

そう言って、その白い腕は石版を取り出して、翼に渡した。

翼がそれを、腰に装着すると、石版は灰色に赤の線の入った変身アイテム、アインズドライバーへと形を変えた。
それから、その腕は、橙色と緑色のメダルを取り出した。

「このメダルをはめなさい」

「やっと廻り始まるぜ、俺の運命が！！」

翼はアインズドライバーの両端に、白と緑のメダルを入れ、最後に中央に橙色のメダルを入れる。
それから、腰の横にあるアインスキャナーを取り出して、三枚のメダルをスキャンした。

ペガサス！　フェンリル！　スフィンクス！

ペ・フ・ス！　ペフス　ペ・フ・ス！！

歌が鳴り、翼は上から、白、橙、緑の戦士――仮面ライダーアインズ＜ペフスコンボ＞に変身した。

「こりゃ、すげぇ」

アインズは腕を鳴らし、オルトロスヤミーに向かう。

「はぁぁ！」

オルトロスヤミーにパンチを入れる。

「がぁぁぁぁ！！」

オルトロスヤミーの拳が、アインズに決まる。

「くっ・・・・・・」

「真ん中をこれに変えなさい！」

白い腕が、アインズに緑色のメダルを投げる。
アインズはフェンリルメダルを引き抜き、代わりにその緑色のメダルを入れ、アインスキャナーを滑らせる。

ペガサス！　ネフェルティ！　スフィンクス！

アインズは爪を展開。

「はあぁぁ！　チェェストォォォォ！」

勢いよく飛び込んで、オルトロスヤミーを切り裂いた。オルトロスヤミーは爆散し、セルメダルが飛び散った。
アインズは変身を解除する。

「あはははは」

空を仰いで、翼は笑い声をあげる。

「私はシェアト。あなたは？」

「俺か？　俺は矢吹翼」

こうして、矢吹翼の運命は廻り始めた。

アインズの使えるメダル

ペガサス　1

ネフェルティ　1

スフィンクス　1

フェンリル　1

第一話：炎のコンボと欲望と運命（後書き）

ええ～～と、今度は続けられるといいな（汗）、とか思ってます。
とりあえず、毎週土曜更新予定です。

第二話；バッタと親子と正義の味方（前書き）

今回は短めです

第二話；バッタと親子と正義の味方

Ψ

暗い夜の公園。
矢吹翼は、そこにあるベンチの上に寝ころんで、空に広がる星を眺めていた。
懐から、白いメダルを取り出して、頭上に掲げる。
そのメダルに刻まれているのは翼を持った馬――天馬。

「はは」

翼は、小さく笑った。

Ψ

（この状態だとあまりにも不便すぎるわね。どうしようかしら？）

白い異形の腕――シェアトは街の中を、人間に見つからないように飛び回りながら、ふとそう思った。
いい案も思いつかず、広いところにでると、そこでは、すでに夜の九時を回っているにも関わらず、数人の青年たちが、大音量で音楽を響かせ、騒ぎあっていた。

（うるさいわね。って・・・・・・あれは！？）

その青年たちの中に、一人の中年の男が割ってはいるのを見て、シエアトは驚愕した。

「音止めろよ！　迷惑なんだよ！」

「あぁ？　なんだオッサン？」

「あ・・・・・いえ、何でもないです」

威勢は良かったものの、青年たちに詰め寄られて、男は怯えるようにして、後ずさる。

その途端、飛蝗（ばった）の姿をした怪人――バッタヤミーが現れた。

（やっぱりヤミーの親。それも、あれはグリードのウヴァのヤミー！）

バッタヤミーは青年たちを殴りとばす。

それを上から、赤、黄、緑の戦士――仮面ライダーオーズが制止した。

（オーズ！？）

バッタヤミーが、スピードでオーズを翻弄する。

「なんてスピードだ・・・・・・アンク、チーターは？」

アンクは、ファイルの中に目をやって、舌打ちをする。

「生憎、品切れだ」

「じゃあ、ゾウは？」

「それも無い！」

アンクは、自らの中から、クジャクメダルを取り出して、オーズに投げつける。

「こいつで何とかしろ！」

オーズはそれを受け取り、オーズドライバーにはめ、オースキャナーを滑らせた。

タカ！　クジャク！　バッタ！

オーズは亜種コンボ＜タジャバコンボ＞へと変身した。
タジャスピナーのカバーを開ける。中には、セルメダルが七枚納められていた。

「セルメダル！？　これをコアに変えれば」

オーズがそういった途端に、青年たちがバイクに乗って逃げ出し、それをバッタヤミーが追いかける。

「くっ」

それをさらに、オーズが追いかけた。

（あの方法があったわね・・・・・・）

人間の体を使っているアンクを見てから、シェアトはどこかへと飛

んでいった。

Ψ

男の足下に、女性が血塗れで倒れていた。

「あはははははははははははは」

声を上げて笑うその男に、二つの視線が向けられていた。

第二話；バッタと親子と正義の味方（後書き）

次回の仮面ライダーＯＯＯ（アインズ）は

「これは便利ね」

「もっと悪いやつらを懲らしめてやる」

「自分に自身を持て。道を間違えたら、誰かが教えてくれる」

「どうしていい事をしたいと思った！！」

「正義のためなら、人は何処までも残酷になれるのか……」

第３話：チョコと信念と正義の力

第三話：チョコと信念と正義の力（前書き）

翼が空気……主人公なのに。

第三話：チョコと信念と正義の力

仮面ライダーアインズ。
前回の三つの出来事。

一つ、司法試験を失敗した男、神林の正義を望む欲望からヤミーが誕生。

二つ、バッタヤミーが人助けをした。

三つ、最後の一撃を放とうとするオーズの前に神林が立ちはだかった。

Ψ

「はあああ」

タジャスピナーに光が集まり、オーズは構えをとる。

「はあああああ・・・・・・はっ！」

そのとき、バッタヤミーとオーズの間に神林が割り込んだ。

「神林さん！！」

「こいつはやらせない！」

「どう・・・・・・して！」

オーズは動揺を隠せずに、言う。

「やっと・・・・・・正義の力を手に入れたんだ。俺は、こいつの力を借りる」

「力って・・・・・・・・・・・・」

「こいつの力を使って、この腐った世の中を少しでも良くしたいんだ」

「お父さん、頑張れ！　お父さん、頑張れぇ！」

神林の息子、隆が神林に走り寄り、オーズの前に立ちはだかる。

「隆くん・・・・・・」

ウヴァとバッタヤミーは、それを不思議そうに見つめてから、逃げるように飛び去った。

「あ・・・・・・待てっ！」

「隆。行くぞ」

「うん！」

「俺たちの邪魔はしないでくれ」

後藤は、反動に耐えながらもバースドライバーを放つ。
自分がまだ反動に耐えきれないと分かると、後藤は土管の上で腕立て伏せを始める。

（お父さんが悪い奴は許しちゃだめだって言ってたのに・・・・・・僕間違ってないよね！　お兄ちゃんもお父さんと一緒？　悪い奴がいてもいいの？）

「いいわけがない」

後藤は、苦虫を噛み潰したような顔で言った。

Ψ

「火野。悪い奴をやっつけるヤミーなんだよな。それでも倒さなくちゃいけないのか？」

クスクシエで、後藤が映司に尋ねた。

「倒さなきゃメダルは手に入らない」

アンクがアイスを喰いながら、答える。

「倒さないと・・・・・・」

映司も同じように答えた。

「何故・・・・・・」

「いっぱい見てきた。誰かを守りたいって気持ちや、自分たちの正義を守りたいって気持ちがどんどんエスカレートすることがある。正義のためなら、人間はどこまでも残酷になれるんだ」

「正義の・・・・・・ためなら・・・・・・」

「神林さんを捜そう。取り返しがつかなくなる前に・・・・・・」

そう言ってから、アンクと一緒に映司はクスクシエを出ていった。

その後ろで、後藤は迷いを巡らせていた。

朝日が、公園のベンチで眠っていた翼の目に差し込む。

「・・・・・・ん。朝か」

ゆっくりと起き上がり、翼はあたりを見回す。

「そういえば・・・・・・シェアトはどこに行ったんだ？」
翼がそう言うのとほぼ同時に、翼の目の前を神林とその息子、隆が横切った。
「ん・・・・・？」
違和感を感じて、翼は二人の後を付ける。
はたして、その二人が向かったのは、とある政治家の屋敷だった。
二人は無断でその屋敷に上がり込み、笑い声が聞こえる部屋のふすまを勢いよく開けた。
そこには、二人の大人たちが座って談笑をしている。
テーブルの上には札束の入った段ボール箱。
「な、なんだお前たちは・・・・・・」
「悪い奴は許さない」
二人の後ろから、バッタヤミーが現れる。それを見て、男たちはあわてて逃げ出す。
（なんかあると思ったが・・・・・・ヤミーの親だったのか。くそっ、メダルが無い！）
翼はとりあえずバッタヤミーを追った。
Ψ

「もう悪いことはしません！　助けて！　助けて！」

男の一人が神林に懇願する。

「でも・・・・・・・・・・・・」

その時、映司とアンクが、政治家の屋敷に駆けつけてきた。

「映司」

アンクがメダルを出すが、屑ヤミーが映司を捕まえる。映司は屑ヤミーを振り払い、オーズドライバーを腰に装着した。

「受け取れ！」

アンクの投げたメダルを受け取り、オーズドライバーに填め込み、オースキャナーを滑らせた。

「変身！」

クワガタ！　トラ！　バッタ！

映司は亜種コンボ＜ガタトラバ＞へと変身し、クワガタ・ヘッドの雷撃で屑ヤミーを破壊する。

（アインズとほとんど変わらないじゃねぇか。何だ、あれは？）

翼は驚きながらも、オーズを見つめる。

「シェアトを探すしかねぇな」

翼は、ふらりとどこかへ歩いていった。

翼がシェアトを探していると、神林隆と後藤が目に入った。

「大丈夫か？」

後藤が隆に話しかける。

「どこか痛いのか・・・・・・」

「お兄ちゃん。やっぱり僕、間違ってたのかな」

「世界を守りたい。俺はそう思ってる」

「お兄ちゃんが？」

「ああ。けど、今の自分じゃ力が足りない。無理なんだ。でも、俺はそうしたいと思った気持ちを信じる。自分を信じる！」

「自分を・・・・・信じる？」

「そうだ。自分を信じろ！　隆はどうして良いことをしたいと思った？　どうして・・・・・」

「僕が・・・・・良いことをしたいって思ったのは・・・・・・」
隆の言葉を遮るようにして、壁を破ってウヴァが現れる。
後藤がバースドライバーで迎撃をするが、ウヴァは後藤の動きを止め、隆に向かって角から雷撃を放つ。隆はその場に倒れ込む。
「お前の欲望を使わせてもらう・・・・・・正義の味方になりたいんだろ」
「お兄ちゃん！」
隆の頭にメダルの投入口が現れる。
「さあ、欲望を解放しろ」
「隆！　どうして良いことをしたいと思った！！　答えろ！」
「僕は・・・・・・僕はお父さんに帰ってきてほしかったんだ！！」
「そんな小さな欲望ではヤミーが生まれない」
後藤はウヴァを振り払い、バースドライバーをウヴァに向けて放つ。
「隆！」
後藤が隆に駆け寄ったところで、映司とアンクが走ってきた。
「遅いぞ！」

「ああ・・・・・・すみません」

「アンク。メダル！」

「死んでも取り返せよ！」

アンクの投げたメダルを受け取り、映司は異オーズドライバーにはめ込む。三枚目を填めようとしたところで、映司は手を止めた。

「おい！　二枚じゃできないって」

「それしかない」

「これだけ！？　お前の貸してよ！」

「絶対に取られるなよ？」

映司はアンクの取り出したコンドルのコアを、素早く取り、オーズドライバーに納め、スキャンする。

タカ！　トラ！　コンドル！

オーズはウヴァに殴りかかった。そこにバッタヤミーが背後から奇襲をかける。

オーズがウヴァとバッタヤミー相手に戦闘をしていると、バースドライバーから放たれたメダルがウヴァにヒットする。

（何だ！？　あいつは）

翼の驚きをよそに、バースはセルメダルをバースドライバー二枚投

入する。

クレーンアーム！

ドリルアーム！

バースの右腕に、ドリルアームとクレーンアームの合体した武器――ドリルクレーンアームが展開される。

ドリルクレーンアームで、ウヴァを翻弄しセルメダルを剥ぐ取っていく。

「お前の攻撃は俺には効かない」

「分かってるさ」

バースは攻撃を続ける。徐々にウヴァにダメージが蓄積されていく。

「はは。セルメダルだって大量に剥ぎ取ればダメージになるだろ？

アンコ！　今だ！」

「は！　俺の名前はアンクだ」

アンクはセルメダルが剥ぎ取られたところから、コアを二枚奪い取った。

バースはドリルクレーンアームを戻す。

「ほらな」

「コアメダルが・・・・・・馬鹿な」

ウヴァはいそいそと逃げ出した。

Ψ

オーズとバッタヤミーとの戦いを翼は不満そうな顔で見ていた。

（くそ・・・・・・俺が戦えれば・・・・・・）

「あ、何だ？　お前は？」

アンクが翼を睨む。

「そんなことよりも、あの戦いどうにかしろよ」

「はあ・・・・・・なにやってんだ？　映司の奴。映司！　一気に片を付けろ！」

アンクはクジャクのコアを取り出して、投げつける。オーズはそれを受け取ってドライバーに填め込む。
三枚の赤いメダルが共鳴して、光を放つ。オーズはオースキャナーを滑らせる。

タカ！　クジャク！　コンドル！

タァージャァァドルゥー！

オーズが炎に包まれ、＜タジャドルコンボ＞へと変身し、は羽を広げて飛び上がる。
オーズドライバーから、メダルを外して、タジャスピナーに填め、

オースキャナーで大量のメダルをスキャンする。

タカ！　クジャク！　コンドル！　ギン！　ギン！　ギン！

ギガスキャン！！！

オーズの全身が燃え上がり、不死鳥の形を形成する。

「はあああああああああああああああああああ」

炎に身を包んで、オーズはバッタヤミーへと突撃し、そのまま粉砕した。

大量のセルメダルが巻き散る。

変身を解除し、映司は倒れ込んだ。

（同じ色のメダルを三枚使うと、あれほどの威力になるのか・・・・・・）

翼は笑いながらその場を後にした。

その腕には、緑色のメダルが握られていた。刻まれているのは――獅子。

オーズの使えるメダル

タカ　2

クジャク　1

コンドル　1

バッタ　1

トラ　1

ゴリラ　1

ウナギ　1

タコ　1

アインズの使えるメダル

ペガサス　1

ネフェルティ　1

スフィンクス　1

フェンリル　1

???　1

第三話：チョコと信念と正義の力（後書き）

次回の仮面ライダーＯＯＯ（アインズ）は

「これは便利ね」

「美穂……？」

「殺したい。殺したい。殺したい。殺したい。殺したい。殺したい。殺したい。殺したい。殺したい。殺したい」

「人の最も醜い欲望か……」

「俺のコアを返してもらおうか」

第四話：殺人鬼とマーモンと幼馴染み

第四話：殺人鬼とマーモンと幼馴染み（前書き）

お待たせしました。
ようやくテストが終わりました。
ひゃっほい（＾ー＾）／

第四話：殺人鬼とマーモンと幼馴染み

Ψ

「殺したい。殺したい。殺したい。殺したい。殺したい。殺したい。殺したい。殺したい」

男は、壊れたラジオのように、同じ言葉を発し続けながら暗い路地を歩いていた。
その男に、一人の青年が近づいていく。
それは、橙色のコートを羽織った、目つきの鋭い青年であった。

「これはいい。人間のもっとも醜い欲望か」

青年の身体がセルメダルに包まれたかと思うと、青年は異形の姿に変わる。
三つ首を持つ犬のような、橙の異形の姿。

「その欲望、解放しろ」

男の額にメダルの投入口が現れ、異形はそこにセルメダルを一枚投げ入れる。

そして――男から、ヤミーが生まれた。

Ψ

矢吹翼は、いつものように公園のベンチで睡眠をとっていた。

「翼。起きなさい。もう昼よ」

声がした。女性の声。
それを聞いて、翼はおもむろに体を起こす。それから、声のした方に視線を移した。
そこにいたのは、長い白銀の髪の女性。

「美穂・・・・・・？」

翼は首を傾げる。その女性は、翼の幼馴染みである綾瀬美穂に非常によく似ていたのだ。
只、髪の色だけが違う。

「残念。今は違うのよ」

そう言って、その女性はおもむろに左手を翼に見せる。その左手が、白い異形の物に変わった。

「・・・・・・は？　シェアト！？」

「そう。腕だけだと不便でしょ。だから、この子の身体を使わせてもらうことにしたの」

「使わせてもらうって・・・・・・ちょっと待てよ！　そんな勝手なこと」

「勝手なことかしら？　私が離れると、この子死んじゃうわよ」

シェアトは翼の言葉を遮る。

「は？　何で？」

「この子を見つけたときには、既に死にかけていたからよ。私がとりつくのが後少しでも遅かったら、この子は確実に死んでいたでしょうね。今でも、あんまり長い時間離れるとまずいわよ」

「美穂が死にかけてた！？　何でそんな？」

「詳しくは知らないわよ。只、人間に殺されかけたのは確かね」

「人間に・・・・・・」

「人を殺すことを欲望とする人間・・・・・・今も昔も人間は大して変わっていないわね」

「今も昔も？　おい、シェアト。特に気にならなかったから、聞かなかったんだけど、お前って何者なんだ？」

「・・・・・・は？　知らなかったの？　コアメダルを持ってたし、ヤミーのことを知ってるから、私たちのことも知っていると思っていたんだけど」

「私・・・・・・たち？」

「そうね・・・・・・。少し、昔話をしてあげるわ。だいたい八百年ぐらいに
、退屈を紛らわそうとした神が、私たちを作ったのよ」

「神・・・・・・？」

「そう、神。神は、神界の生物の力を封じ込めたメダルを作った。
そのメダルから生まれたのが私たち――マーモン」

「神なんて物が・・・・・・」

翼がそう言ったところで、シェアトの耳にセルメダルの音が聞こえてきた。

「ヤミーね。翼。そのことは後で教えてあげるから、今はヤミーを倒すことを優先してくれるかしら」

「ヤミーか・・・・・・仕方ない。シェアト、ちゃんと後で教えろよ」

「分かってるわよ」

翼は懐から、セルメダルを一枚取り出して、最寄りの自動販売機に投入して、中央のボタンを押す。
自動販売機が、ライドベンダーに変形し、翼がそれに跨ると、その後ろにシェアトが横向きで座った。

「メダルの節約よ」

翼はライドベンダーを走らせ、ヤミーの元へ向かった。
ヤミーがいたのは、とある公園だった。
そこには――血の海が広がっていた。
大量の死体。

首が落とされたもの。腹が抉られたもの。バラバラにされたもの。
それは、まるで地獄のような光景であった。

「何、だ・・・・・・これ」

思わず、翼は口に手を当てる。

「人間のもっとも醜い欲望ね・・・・・・」

ヤミーの姿が変わり、赤い目をした黒い犬の怪人――バーゲストヤミーと翼は対峙する。

「シェアト。メダル！」

翼はアインズドライバーを腰に装着してから、シェアトの投げた三枚のメダルを受け取り、ドライバーに納める。

「変身！」

翼は、勢いよくアインスキャナーを滑らせた。

ペガサス！　フェンリル！　スフィンクス！

ペ・フ・ス！　ペフス　ペ・フ・ス！

「さて、いろいろとフラストレーション溜まってたから、一気に精算させてもらうぜ！」

そう言って、アインズはバーゲストヤミーに向かっていく。
バーゲストヤミーはアインズのパンチを避けて、アインズを鋭利な

爪で斬り裂く。

「くっ！」

アインズは、後ろに下がって、バーゲストヤミーから距離を取る。

「ろくな武器が無い！　シェアト、ネフェルティのメダルだ！」

「仕方ないわね！」

シェアトは、緑色のメダルをアインズに投げる。
アインズはそれを受け取り、アインズドライバーに填め込み、スキャンする。

ペガサス！　ネフェルティ！　スフィンクス！

アインズの姿が亜種コンボである＜ペフェルス＞へと変化した。
アインズは、両腕の爪を展開する。

「行くぜ！」

アインズは、再びバーゲストヤミーとの距離を詰める。
右の爪で、バーゲストヤミーの身体を斬り裂いてから、蹴りを入れる。
バーゲストヤミーが仰け反ったところに、アインズはさらに爪を突き刺した。
それから、バーゲストヤミーから再び距離を取り、メダルを入れ替え、アインスキャナーを滑らせた。

ペガサス！　フェンリル！　スフィンクス！

ペ・フ・ス！　ペフス　ペ・フ・ス！

「とどめだ！」

アインズは、メダルをスキャンする。

スキャニングチャージ！

姿勢を低くして構える。

スフィンクスレッグの右足に光が集まり、アインズは高速で移動して跳び上がった。

アインズの前に、白・橙・緑の輪が現れる。

「はあああ！　チェストォォ！」

輪を通り抜けて、バーゲストヤミーに蹴りを放つ。

しかし、次の瞬間、弾きとばされたのは、ヤミーではなく、アインズだった。

「なっ・・・・・・！」

バーゲストヤミーの前に、橙色の異形が存在していた。

「何だ。あいつは？」

「翼！　そいつは、私と同じマーモンの一人、シリウスよ！」

「マーモン・・・・・・こいつが」

シリウスはゆっくりと、アインズに近づいていく。

「俺のメダルを返してもらおうか」

アインズの使えるメダル

ペガサス　1

ネフェルティ　1

スフィンクス　1

フェンリル　1

???　1

第四話：殺人鬼とマーモンと幼馴染み（後書き）

次回の仮面ライダーＯＯＯ（アインズ）は

「俺は、美穂を助けるために戦う」

「私達は強欲（マーモン）よ。欲しがらなくてどうするの」

「人を殺したいと願う。その欲望には、理由がない」

「同じ色のメダルを三枚使えば！」

バステト！　ネフェルティ！　スフィンクス！

第五話：理由と強欲と雷鳴のコンボ

第五話：理由と強欲と雷鳴コンボ（前書き）

死力を尽くしました。
本編の前に、偽予告をどうぞ。

売り切れ続出のコアメダル。
それに耐え兼ねた一人の男が黒魔術に手を出した。
彼が用意したのは――戦場。
メダルを欲しがる子供達。
子供のために死力を尽くす親達。
＋α。
そして――転売屋。
コアメダルを巡る聖戦（ジハード）が始まる。

０００／ｒｅａｌ
コアメダル争奪戦争史

求めるならば、戦え。

以上……です。評判がよかったら作品化するかも……

……バタリ。↑作者の倒れる音

第五話：理由と強欲と雷鳴コンボ

仮面ライダーアインズ。
前回までの三つの出来事。

一つ、殺人鬼の欲望からヤミーが誕生。

二つ、翼の幼馴染み、綾瀬美穂にシェアトがとり付いた。

そして三つ、バーゲストヤミーにとどめを刺そうとしたアインズを、マーモンの一人、シリウスが弾き飛ばした。

Ψ

「俺のコアを返してもらおうか」

じりじりとシリウスは、アインズに近寄る。

「くっ・・・・・・」

アインズは足を引きずって、立ち上がる。

「無防備な状態で攻撃されたのがいけなかったわね。ダメージがひどい。ここは、どうにかして逃げないと、シリウスとまともにやり合うのは無理ね」

シェアトは、思考を廻らせる。

「せめて、もう少しメダルがあれば・・・・・・」

その時、シェアトの呟きをかき消すかのように。

――轟音が響いた。

高速で発射されたメダルが、シリウスを直撃する。

メダルの発射された方を、アインズとシェアトが見ると、そこにいたのは、ライドベンダーに跨った一人の男。

「誰だか知んねーけど、加勢は必要か？」

男の手には、銀色の巨大な銃――バースバスターが握られている。

「なっ・・・・・・いや、今は！　頼む！」

「了解！」

悠長にそう言って、男はベルト――バースドライバーを取り出し、それを腰に巻いた。

「さあて、行きますか」

セルメダルを一枚、指で弾いてから、力強く握り、バースドライバーに投入した。

「変身！」

無骨な機械音が響き、男の体は銀と緑の装甲に包まれ、仮面ライダーバースへと変身した。
指を鳴らして、バースはシリウスとバーゲストヤミーに向かっていく。
バースドライバーに、セルメダルを投入し、右腕にドリルアームを展開する。

「はあ！」

ドリルアームがシリウスの身体から、セルメダルを削り取る。

「くっ・・・・・・邪魔をするなぁ！」

シリウスの叫びと同時に、バーゲストヤミーがバースを殴りつける。
バースはバースバスターでバーゲストヤミーに応戦。

「俺のコアメダルを・・・・・・返せ！」

シリウスが動けずにいるアインズに向かっていく。

「おいっ！　待てって！」

バースは、バースバスターをバーゲストヤミーに放ち、セルメダルをバースドライバーに投入した。

クレーンアーム！

バースの伸ばしたドリルクレーンアームが、シリウスの無防備な背中に直撃し、そのままメダルを大量に削り取った。

「ぐっ・・・・・・・・あぁ・・・・・・・・」

シリウスが纏っていた橙色の鎧が砕け散る。

「く・・・・・・そ・・・・・・・俺の・・・・・・・コアが」

シリウスは片膝をつく。

「今が好機ね……」

「シェアト！　俺のコアを返せ！」

シリウスが叫ぶ。

「嫌よ」

「何故だ！？　お前、まさか全てのコアを集めるつもりか！！」

「そうよ。私達は欲望（マーモン）よ。欲しがらなくてどうするの」

「貴様ぁ！！」

「そんなことはどうでもいいとして、シリウス。いくらあなたでも、大量にメダルを消費したばかりでは戦えないでしょ。退いてくれないかしら？」

「くそ！！　次こそは俺のメダルを取り返す！」

そう言い捨てて、シリウスはおぼつかない足取りで逃げ出す。

それに続いて、バーゲストヤミーも逃げ出した。

「はあ・・・・・・何とかなったわね」

シェアトは溜め息混じりにそう呟く。

「翼。大丈夫？」

シェアトが翼の方を見ると、そこには変身を解除し倒れ込んでいる翼の姿があった。

「翼！」

シェアトが、翼に走り寄る。

「気を失っているだけね・・・・・・」

シェアトは胸をなで下ろしながら言った。それから、シェアトはバースの方へ目を向ける。

「これは・・・・・・始めて見るコアメダルだな」

バースは、ドリルアームに付着した二枚の橙色のメダルを見て言った。

「そのメダル。渡してくれないかしら？」

シェアトが言うと、バースは二枚のメダルを、シェアトに向かって投げつけた。

「えっ！？」

シェアトは驚きながらも、そのメダルを受け取る。

「どうかしたか？」

「いえ・・・・・・あまりにも簡単に渡してくれたから・・・・・・・」

「コアメダルは、ギャラの対象外だからな。持ってても使えないし」

「そ・・・・・・そう」

バースは変身を解除し、ライダベンダーに跨った。

「んじゃ、また縁があったらな」

そう言って、男――伊達明はライドベンダーを走らせた。

「変な男ね。……まあ、とにかく

――三枚揃ったわね」

Ψ

昔から、お節介な奴だとは思っていた。

――翼くん。

――翼くん。

――翼くん。

次々と美穂の表情が浮かぶ。
いつからだったのだろう。そのお節介なところが、愛おしく思えるようになったのは

・・・・・・。

Ψ

翼が目を覚ますと、目の前には一人の女性がいた。

「美穂！」

翼は勢いよく起き上がる。

「今はシェアトよ」

女性――シェアトは、落ち着いた声色でそう言った。

「そうだったな・・・・・・さっきのマーモン――シリウスは！？」

「変な男が撃退したわ。見ていたでしょう？」

シェアトに言われ、翼は記憶を確認する。
「そう言えば、変な男に加勢を頼んだのだったっけ。シリウスを倒したのか？」
「いいえ。シリウスは逃げたわ」
「じゃあ、ヤミーは？」
「ヤミーも逃げたわ」
それを聞いて、翼は考え込むかのように、頭を伏せた。
「シェアト。お前がそんな、
腕だけの状態なのはメダルが足りないからだよな」
「そうね。で、それがどうしたの？」
「メダルが増えれば、美穂を殺さずに離れることが出来るのか？」
「――出来るわ。私が完全に復活すれば、その程度のことは簡単に出来る」
間を置かずに、シェアトは言った。
それを聞いて、翼は空を仰ぐ。それから、翼は再びシェアトの方を見た。
その表情は決意に満ちていた。

「シェアト。今まで流されるままに人生を送ってきた、理由もなく戦ってきた俺にも、助けたいと思える人がいるんだ。

決めたよ。俺は——美穂を助けるために戦う」

静かだが、しかし計りようのない力強さを持った口調。

それに、シェアトは驚いた。そして、自らの決意、願いを再度確認した。

こんなにも、人間はすばらしいのだと。やはり、自分の願いは間違っていなかったのだと。

シェアトは一途に願う。

——私は人間になりたい、と。

「・・・・・・・・・・・・そう。なら、頑張ってメダルを稼いでもらいましょうか。ヤミーよ、翼」

シェアトはセルメダルの音を確認してから言う。

「ああ。戦うよ、俺は」

そして、翼は戦場に赴く。

Ψ

「殺したい。殺したい。殺したいィ。殺シタイ。コロシタイ。コロシタィィィィィiiiiiiiiiii！！！！！！！——！」

バーゲストヤミーは咆哮し、人間を喰らい続ける。
セルメダルが異常な速度で作り出され、バーゲストヤミーの身体がさらなる異形へと変化していく。新たに、首が二本生え、体中から、無数の黒い鎖が飛び出す。
それを見て、シリウスは犯しそうに笑みを浮かべた。

「人を殺したいと願う。その欲望には理由がない。故に、いくらでも大きくなる。
さあ、喰らえ。喰らい尽くせ！」

その時、翼が走り込んできた。

「させるかよ！！」

翼は走りながら、力強くアインスキャナーを滑らせる。

ペガサス！　フェンリル！　スフィンクス！

ペ・フ・ス！　ペフス　ペ・フ・ス！

「はあああ」

――ガギィリ。

アインズの拳を鎖が阻む。バーゲストヤミーが進化した姿――バーゲストケルベロス

ヤミーが身体を捻ると、無数の鎖がアインズに襲い掛かった。

「くっ……そ……」

アインズが弾き飛ばされる。
再びアインズはバーゲストケルベロスヤミーに向かい、メダルをスキャン。

スキャニングチャージ！！

三つの輪をくぐり、蹴りを放つが、鎖に弾かれる。

「くっ……」

「勝てないな！　このヤミーには！」

シリウスが勝ち誇ったように言う。

「まだだ！！　同じ色のメダルを三枚使えば！」

アインズは、緑色のメダルを取り出す。

「シェアト！　ネフェルティのメダル！！」

「……受け取りなさい！」

シェアトの投げたメダルを受け取り、自身の持っていたメダルと一緒にアインズドライバーに填め込んだ。
メダルが共鳴しあい、小さく光を放つ。
そして、アインズは三枚の緑色のメダルが収められたアインズドライバーに、アインスキャナーを滑らせた。

バステト！　ネフェルティ！　スフィンクス！

　バス！　テル！　バステールース！

「おおお」

雷が走り、アインズの姿が＜バステルスコンボ＞へと変化した。

全身に、雷のような文様が現れる。

「馬鹿な！　コンボだと！」

「はああああああああ」

アインズの姿が消え、そして、次の瞬間、バーゲストケルベロスヤミーの鎖が全て、支えを失って、地に落ちる。

「止めだ！！！！」

アインズは、メダルをスキャン。

　スキャニングチャージ！！！

獅子の咆哮が響く。

「はああああああああ、チェストぉぉぉぉおおおお！！！！！！」

アインズの姿が消え、緑の雷が走った。

そして、その直後。

――轟音が響き、バーゲストケルベロスヤミーが爆散し、セルメダルが大量に散らばった。

アインズの姿が、再び現れたかと思うと、変身が解除され、翼は前のめりに倒れこんだ。

それに、シェアトが駆け寄る。

「お疲れ様。翼」

それから、シェアトの髪が、白銀から黒に変わる。

「待ってますよ。翼くんが私を助けてくれるのを」

一瞬のことではあったが、それは間違いなく綾瀬美穂の言葉であった。

アインズの使えるメダル

ペガサス　1

バステト　1

ネフェルティ　1

スフィンクス　1

???　1

フェンリル　1

???　1

第五話：理由と強欲と雷鳴コンボ（後書き）

次回の仮面ライダー０００（アインズ）は

「翼。持ってるコアメダル、全部出しなさい」

「そう言えば、伊達さんって、海外で何の仕事してたんですか」

「伊達くん？」

「本っ当、久しぶりだな」

「進化を止めてる君は、僕には勝てない」

第六話：キレイと卵と眠る欲望

第六話：キレイと卵と眠る欲望（前書き）

今回は長くなりました。

第六話：キレイと卵と眠る欲望

Ψ

目を覚ました翼の目の前にいたのは、やはり長い白銀の髪の女性だった。
いつの間に寝ていたのだろうかと、疑問に思いながらも翼は体を起こす。

「お・・・・・・シェアト」

「起きてすぐで悪いんだけど・・・・・・翼。持ってるメダル、全部出しなさい」

それを聞いて、翼は黙り込む。

「・・・・・・持ってな――」

「――嘘ね。今の間は何？　早く出しなさい」

「・・・・・・はあ」

翼はため息をつき、懐からメダルを二枚取り出した。

「やっぱり、持っていたのね」

「あれ？　緑のメダルが無いぞ」

「それは、これのことかしら？」

シェアトが、バステトのメダルを翼に見せた。

「それそれ。だけどお前、いつの間に・・・・・・って、あ」

記憶が鮮明に浮かび上がってきた。

「忘れていたの？　まあ、いいわ。翼、これからは勝手にコンボを使うのは禁止よ」

「コンボ？」

翼は首を傾げる。

「あなたが使った、同じ色のメダル三枚を使うやつよ」

「ああ、あれってコンボって言うんだ」

「コンボは危険よ。あなたも、結構な時間眠っていたわ」

「・・・・・了解。勝手には、使わねぇよ」

翼はそう言ってから、また眠りについた。

翼の出したメダル、その色は赤と黒だった。

Ψ

とある漫画喫茶の中で、金髪の青年が白と灰色のコアメダルを自身の中に入れるのを、真木は画面越しに見ていた。

「どうです？」

真木が青年――カザリに問いかける。

『また満たされた気がするよ。僕の中に。少しだけど』

「二枚ではその程度でしょう。メダルの器になりたいなら、一気に増やしてもいいと思うんですがねぇ」

『無茶して暴走したら、終わりでしょ。今がどの程度かは、ヤミーを作って確かめる』

「いいでしょう。ではまた、経過報告を」

通信が切られ、パソコンの画面からカザリの顔が消える。
それを確認してから、真木は立ち上がる。それと同時に、研究室のドアが開いて、伊達が中に入ってきた。布袋と小さな机を抱えている。

「はい、ちょっとごめんよ。いや～、ここ寒～からさぁ。炬燵もらってきた、炬燵。これぞ日本だよね～」

「伊達くん。そんなことをしている暇があったら、メディカルチェックに行ってください。バースシステムが人体に影響を与えるか否か、ぜひデータが欲しいんです」

「影響はゼロ。本人が言うんだから、間違いないって」
伊達は炬燵を作りながら答える。
「チェックは必要です。特に君の場合は」
「大丈夫。俺の本職知ってるでしょ。心配ご無用！」
「心配はしていません。データが欲しいんです」
真木は、バースドライバーの内部構造が映し出されたパソコンの画面を見ながら言う。
「いいね、そういう本音。けっこう好きよ」
「うわっ！」
伊達が人形に近づくと、真木は人形をかばう。
「大丈夫。触んないって・・・・・・わっ！」
「あぁ！」
伊達が人形に触る素振りを見せ、真木が叫ぶ。
「わっ！」
「あああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

真木の叫びが研究所に響きわたった。

クスクシエの奥の部屋で、アンクは深刻そうにメダルホルダーを見つめる。

「前より集めにくくなったな。しかも、使えるコンボは俺のだけか。このままじゃ、あいつらに」

「メダルがいる。それも、コンボの出来る・・・・・・」

アンクは、二枚の青いコアメダルを指でなぞった。

「メダル……全部出せとは言ってたけど、まあこれはコアじゃないし……いいか」

そう言う翼の手に握られていたのは三枚の縁(ふち)が金色の透明なメダル。それはコアメダルのようではあったが。

そこには――何も刻まれてはいなかった。

Ψ

「皆さん。こちらが、この誰でもモテ肌になれると大ブームの美容パック『海女神』を開発した美容サロン『ビューティーマリンラボ』の本社ビルです！」

奥の建物を指さして、レポーターが言う。

「突撃ー！」

レポーターはカメラマンと一緒に、ビルに向かって走り、中に入る。

「今日は、こちらの社長兼『海女神』の開発者でありながら、その美しさでイメージモデルまでこなすスーパーウーマンをご紹介します」

レポーター達を、一人の女性が笑顔で出迎える。

「ようこそ」

「おお！　まさに美と智を兼ね備えたの現代女神、佐倉麗社長です！　美しい～！」

「すいませーん・・・・・・すいませーん」

レポーターがそう言ったのと同時に、白衣にマスク、ニット帽の女性が白い屑籠（くずかご）を引いてカメラマンの間を通り抜ける。

それを見て、佐倉麗は小さく舌打ちをした。

女性が通り抜けてから、レポーターがもう一度初めからやるように

カメラマンに言う。

屑籠を引いて走っていくその女性を見ながら、ガラスの外でカザリは笑みを浮かべていた。

Ψ

映司と伊達は、おでんの屋台が用意した外のテーブルで談話しながら、食事をしていた。

「そういえば、伊達さんって海外で何の仕事してたんですか？」

「いやいやいや。見りゃわかるでしょ。このインテリな雰囲気で」

「インテリ・・・・・・・・・・・・・」

首を傾げる映司の肩をアンクが掴んだ。

「来い！　この気配、ウヴァとカザリだ」

「ああ・・・・・・ごちそうさまです！」

二人は走っていく。

「俺のゴリラくん、反応しないんだけど！」

伊達は屋台の暖簾を捲り上げる

「ごっつぉさぁん！」

「もう帰っちゃうの！？」

「ちょっと野暮用で。はいこれ。釣りはいいから！」

お札を一枚渡して、屋台を出ようとすると、伊達は女性とぶつかった。

「おお！　すんません・・・・・・って、あれ？」

「伊達くん？」

「佐倉？」

「あぁー、久しぶり」

「本っ当、久しぶりだな！」

「こんなとこで嘘みたい。あっ！　急におでんが食べたくなったのって、何かの予感だったのかな。あ・・・・・・こんな格好で出てきちゃって」

「悪ぃ。急いでるから」

「え！？」

伊達は、セルメダルの缶を担ぐ。

「そうだ。夕飯どう？　六時にここで。なっ」

そう言い残して、伊達は走っていった。

Ψ

「いつかは、落とし前をつけようと思っていた」

「残念だけど、進化を止めてる君は僕には勝てない」

ウヴァが、カザリに殴りかかる。それを、避けてカザリは後ろに飛び、右手から水流を放った。

「何！？　メズールの力を」

「そ。コアを取り込むって、こういうことだよ」

「何だと・・・・・・」

そこに、アンクと映司が走ってくる。

「ほぉ・・・・・・面白いことになってるな」

「へぇー、わざわざ僕のコア、返しにきてくれたんだ」

カザリがアンクを振り向いて言い、黄色い竜巻を腕から放ち、アンクと映司を吹き飛ばした。

「映司」

アンクが、映司にメダルを三枚、渡す。それを受け取り、映司はオーズドライバーに納め、オースキャナーを走らせる。

タカ！　ゴリラ！　タコ！

映司は亜種コンボ＜タカゴリタ＞に変身した。
鷹の頭、ゴリラの腕、そして蛸の足を持つ姿に変わる。
変身したのとほぼ同時に、カザリが水流を放った。オーズはそれを受けて、のけぞる。

「あああ」

「違う。昔のカザリとは・・・・・・全然」

ウヴァはそそくさと逃げ出す。

「あああああ・・・・・・はあ！！」

オーズはゴリラの腕で、水流を払った。カザリの腕の爪が伸び、カザリはオーズに飛びかかる。
その時、伊達が走ってきた。

「あら？　グリードだけ？　まあ、ちっとは稼げるか」

伊達はセルメダルを一枚、指で弾いた。バースドライバーを腰にセットする。
伊達は落ちてきたセルメダルを、力強く握りしめた。

「変身」

伊達が摘みを回すと、機械音が響きわたり、伊達の体は銀色に緑の入った装甲に包まれていく。

「さあ、お仕事開始だ」

バースは、右手にバースバスターを構えた。
カザリに向けて、セルメダルを連続で放つが、カザリを黄色の竜巻が包み、セルメダルを弾く。

「何っ？」

カザリは重力を操って、バースを持ち上げる。

「あれ？　お、おお・・・・・・！？」

そのまま、鉄柱にぶつけた。

「ぐぁぁ」

バースは再び、カザリに向かうが、オーズとともに弾きとばされる。

「野郎っ！」

バースはドリルアームを展開し、カザリに向かう。

「今だ！」

オーズはゴリラの両腕を飛ばが、カザリは重力を操ってその腕を明

後日の方向に弾く。

「無駄だよ」

カザリの両腕から放たれた水流が、オーズとバースを飲み込む。
砕けたドリルアームを見て、バースは驚愕の声を上げる。

「あら！？　おっ・・・・・・やっべ」

その光景を、木の影からアンクが見ていた。

「カザリの奴、まさかここまでとはな」

カザリが、オーズとバースに詰め寄る。

「そろそろ、終わりにしようか」

それを聞いて、アンクは自身の中から、二枚のコアメダルを取り出した。

「映司。何とか、切り抜けろ」

それをオーズに向けて投げつける。

「分かった」

「痛っ」

メダルを受け取ったオーズの腕が、バースの頭に直撃し、バースは声を上げた。

「すいません」

謝ってから、二枚のメダルをオーズドライバーに納めて、スキャンした。

タカ！　クジャク！　コンドル！

タァージャァァドルゥー！

オーズが、赤き鳥の如き姿に変わる。

オーズが、タジャスピナーから炎を放ち、それに対抗して、カザリも黄色い竜巻を放つ。

両者の攻撃が拮抗するが、炎が竜巻を破り、カザリに届く。

「ふん。僕の進化は、まだまだこれからだよ」

そう言って、カザリは逃げ出した。

「ああ・・・・・・・くっ」

オーズが崩れ落ちる。

「大丈夫か」

「あ・・・・・・大丈夫です」

オーズをバースが支えた。その光景を見ながら、アンクはメダルホルダーを開く。

「やっぱり、足りない。とにかくメダルだ」

Ψ

研究室で、佐倉優美は赤い口紅を唇に塗った。
彼女の耳には、異形の声が。そして――

――セルメダルの音、それがアンクとシェアトの耳に届いた。

Ψ

橋の上を、佐倉優美が歩いている。

そこに映司とアンク、翼とシェアトがそれぞれ別の方向から走ってきた。

「あれだ」

「あれね」

アンクとシェアトが言う。

「おい、待て！」

アンクが叫ぶと、佐倉優美が四人の方を向いた。

「綺麗になりたい」

優美が呟いた。

「ちっ・・・・・・まだ卵か」

「「その卵、渡してください（渡せ）！」」

映司と翼が走り出す。

その瞬間、優美の口が僅かに歪み、卵の中から大量のエイヤミーが生まれ出た。

「うわぁ！　アンク！」

「シェアト！　メダル！」

翼と映司がエイヤミーを避けながら言うと、シェアトとアンクは三枚のメダルを投げつけた。

翼と映司の二人は転がりながらも、三枚のメダルを互いのドライバーに填め込んでから立ち上がり、メダルをスキャンする。

「「変身！」」

二人の声が響いた。

タカ！　トラ！　バッタ！

ペガサス！　フェンリル！　スフィンクス！

タ・ト・バ！　タトバ　タ・ト・バ！

ペ・フ・ス！　ペフス　ペ・フ・ス！

「えぅ！？　あなたは・・・・・・？」

オーズが不思議そうに、アインズを見る。

「今はそれどころじゃねえだろ！　早く戦え！」

「確かに・・・・・・！」

アインズはエイヤミーを殴り、オーズはメダジャリバーでエイヤミーを斬り裂いていく。

「あいつは・・・・・・」

アンクも不思議そうにアインズを見つめる。

「あなたも早く戦いなさい！」

シェアトもエイヤミーを殴りながら、不思議そうにアインズを見つめるアンクを窘める。

「ああ・・・・・・しつこいな、もう！」

オーズとアインズがエイヤミーに気を取られているうちに、優美は四人に背を向けて橋を歩いていく。

「ちょっと待って！」

「くそっ・・・・・・邪魔だ、こいつら！」

オーズとアインズが叫ぶ。

「おい、映司！　うあああぁぁぁ」

アンクの悲鳴にも似た声が響く。

「くっ・・・・・・」

オーズが、メダジャリバーにセルメダルを三枚投入し、スキャンした。

トリプル！　スキャニングチャージ！

「せいりゃー！！」

エイヤミーをすべて斬り裂いた。

オーズとアインズは、変身を解除する。

「「あなたたち（おまえら）は？」」

映司とアンクが声を揃えて言った。

「そんなことは後回し。今はヤミーが先決でしょ」

シェアトはそう言ってから、翼の手を引いて優美の歩いていった方へ、走っていく。それを追って、映司とアンクも走り出した。

Ψ

欲望が加速していく。

「もっと、綺麗に」

――そうだ、欲しがれ。お前が欲しいものを。

「もっと・・・・・・もっと」

――欲しがれ。妹のように、妹よりももっと。

――フフッ、ハハハハハ。

「すごい！　あんな綺麗な人がいるなんて！」

「早まった！　結婚なんてしなければよかった！」

「俺、彼女と別れる！」

女性が階段を上っていて、その周りでは老若男女問わず彼女に魅了

されていた。その光景を見て、翼と映司は呟く。

「「何だ？　これ」」

「火野！」

「伊達さん！　ヤミーの卵です！」

「あんたは、あの時の！」

翼は伊達を見て、声を上げた。

「ん？　何処かで会ったか？」

「ああ、そうか。あの時は変身していたっけ。いやいや・・・・・・・そんなことよりも今はヤミーだ！」

映司と翼、そして伊達は階段を駆け上がる。

そこで、女性が振り向いた。

「え・・・・・・佐倉か」

伊達が言う。

その微笑みに、映司が魅了された。まるで、心を打たれたように後ろに倒れ込む。

「おお・・・・・・ちょうちょうちょうちょ」

伊達と翼が支えようとするも、一緒に階段を転がり落ちてしまう。

映司の顔が、噴水に突っ込まれる。

「初めて見た。あんな素敵な人！　綺麗だなぁ」

「おい！　どうした！　しっかりしろ、火野！」

優美の持つ卵が光を放つ。

映司は惚けた顔で、優美を見つめていた。

オーズの使えるメダル

タカ　2
クジャク　1
コンドル　！
バッタ　1
トラ　1
ゴリラ　1
ウナギ　1
タコ　1

アインズの使えるメダル

ペガサス　1
バステト　1
ネフェルティ　1
スフィンクス　1
???　1
フェンリル　1
???　1

? ?
? ?
? ?

1 1

第六話：キレイと卵と眠る欲望（後書き）

次回の仮面ライダー０００（アインズ）は

「ねえ、アンク。グリードも、恋ってする？」

「綺麗になるって気持ちいいのね」

「今のお前は欲望って言う酒に酔っぱらっているだけだ！」

「久しぶりね。カザリ」

「シェアト！　メダル！　オレンジを二枚！」

「また、勝手なことを！」

「映司。このコンボだ！」

シャチ！　ウナギ！　タコ！

第七話：恋と海のコンボと疾風コンボ

第七話：恋と海のコンボと疾風コンボ（前書き）

すみませんm（__）m
遅くなりました

お気づきの方もいらっしゃると思いますが、翼は戦闘になると人が変わります。

第七話：恋と海のコンボと疾風コンボ

仮面ライダーアインズ。
前回までの三つの出来事

一つ、伊達はかつての仕事仲間、佐倉優美と再会。

二つ、妹のように綺麗になろうとした優美の欲望からヤミーの卵が誕生。

そして三つ、ヤミーの力で美しく変身した優美に映司までもが虜になってしまった。

Ψ

「初めて見た。あんな素敵な人。綺麗だなぁ」

優美を見つめながら、映司は言う。

「佐倉、お前・・・・・・」

「伊達くん。どうしてあなたは他の人みたいにならないの？　私綺麗でしょ」

「何言ってんだ、お前。その卵渡せ！」

「俺もなってないんだけどな！」

伊達と翼が優美に向かって走り出すと、優美は卵を頭上に掲げた。
卵が光り出し、中から大量のエイヤミーが噴き出された。

「くっ・・・・・・」

伊達はバースバスターを取り出し、エイヤミーに砲撃をする。
砲撃から逸れたエイヤミーが映司に向かい、それを何処からともなく走ってきたアンクが右腕で弾いた。

「おい、映司！　なにボーっとしてる！」

映司の頭を小突いてから、エイヤミーを殴り飛ばす。

「くっ・・・・・・そ！　シェアトは何処行ったんだ！」

翼はエイヤミーを避けながら叫んだ。
その光景を見ながら優美は小さく微笑み、卵を下ろすと、四人に背を向けて歩いていった。

「しまった・・・・・・」

伊達はバースバスターで残りのエイヤミーを撃ち落としてから言う。

「また逃げられたか」

「アンク、なんか変なんだ。コンボもしていないのに、胸が苦しくて・・・・・・なんかド

キドキしてる」

「あ？」

映司は立ち上がって、オースキャナーを滑らせるような仕草をし、胸の前でハートを作る。

「これって、恋愛の・・・・・・コンボ」

ＬＯＶＥ！　ＬＯＶＥ！　ＬＯＶＥ～！

映司の脳内で再生される変身音。

「馬鹿か・・・・・・おい映司、しっかりしろ」

「あ～あ、完全に落ちちゃったみたいね、恋ってやつに！」

「馬鹿か・・・・・・」

アンクは困惑したような表情で言う。

「まっ、ヤミーのせいだけどな」

「俺はなってないけど・・・・・・」

ほとんど空気になりかけていた翼が言った。

「効果は個人差があるんだろうな・・・・・・それよりも、問題は・・・・・・」

伊達は優美の歩いていった方を深刻な表情で見ていた。

街の光に照らされた夜道を佐倉優美は、卵を抱えて歩いていく。

――もっと美しくなりたいだろう。

「なりたい、もっと。もっと綺麗に」

――なれる、お前も妹のように。妹よりもっと。

――フフフ、ハッハハハハハハ。

Ψ

ビューティーマリンラボの社長室で、佐倉麗は机の上に広がっていた書類を丸めて投げ捨てた。

「失礼します。社長、そろそろお時間です」

そこに秘書の男が入って来る。

「姉さん連れてきて。頼んでおいた新商品の資料、全然出来てないのよ！」

「そういえば今日、主任見かけませんね。取りそぎ、ほかの研究員

に頼んでは・・・・・・・」

「駄目よ！」

麗が声を荒げる。

「駄目・・・・・・はいはい」

「とにかく姉さん捜して」

「はい！」

秘書が扉に向かっていき、扉の直前で振り返る。

「社長は発表会場の方へお願いします」

それだけ言い残して、秘書は社長室を出ていった。

「姉さん、何で急に？　私を困らせようってわけ？　何よ、研究しかできないくせに。会社が成功したのは全部私のおかげじゃない・・・・・私の」

麗は鏡に映った自分の顔を見つめていた。

新商品の発表会場である水族館の中を佐倉優美は歩いていた。

お前は美しい。だがもっと欲しがれ。
美しさはそれを認めるものがあってこそ。妹のように。
優美が卵を床に起き、それが割れて、エイサイヤミーが誕生した。
「麗のように、私の美しさをもっと・・・・・・」

Ψ

真木の研究所で炬燵に入った伊達は、里中の持つモニターに映った鴻上光生と対峙していた。
「伊達くん、バースとしての君の働きはすばらしいが、一応収支状況を報告しておこうと思ってね。里中くん」
「はい。今月のセルメダルの収支、マイナス５２３枚です」
「あら・・・・・・」
「これでは一億にはほど遠いね」
「デカく使わなきゃ、デカく稼げませよ」
「その考え方は、正しい！！」
鴻上が声を上げる。

「よろしい。里中くん、行こう」

「はい。・・・・・・・・・・・・・デカく使って、デカく稼ぐ。いい言葉ですね。好きです」

「そう？　ギャラの方、よろしくね」

「さぁ・・・・・・・」

そう言い残して、里中は研究室を出ていく。

「え？　さぁって・・・・・・・。ちょっと、ちょっと」

「伊達くん。稼ぐつもりなら、グリードと無茶な戦いはしないでください。バースはセルメダル専用システムですから」

真木はドリルアームを修理しながら言う。

「まあまあ・・・・・・とにかく修理よろしく！　早めにね」

それから、数十分後。

真木は修理を続け、伊達がテレビを見ていると。

『皆さん、ビューティーマリンラボの新商品が発表されるのですが……な、なんと新社長まで発表されました！　前社長を遙かに凌ぐその美しさに会場が一気に恋に落ちた状態です』

『初めまして、ビューティーマリンラボ社長、佐倉優美です』

「佐倉・・・・・・」

テレビ画面に映った佐倉を見て、伊達はつぶやいた。

「ドクター！　メンテ終わった？」

「終わってますよ。必要以上に」

「さっすが・・・・・・頂戴」

真木は伊達にバースドライバーを手渡す。

「ちょっと行ってくるわ」

伊達はセルメダルの缶を担いで、研究室を出ていった。
その後で、真木は炬燵に近づいていき、そこに置かれていたカードを取り上げた。

「・・・・・・あぁぁ、あぁ、あああああああああああああああああああああ」

それに写っている写真を見て真木は絶叫した。

Ψ

クスクシエの店内で、アンクとシェアトは話し込んでいた。

「なるほど・・・・・・マーモンも復活していたとはな。それで、

あいつがアインズか」
アンクは後藤と話している翼を指さして言う。
「そうよ」
それを聞いて、アンクは考え込んだ。
こいつらを敵に回すよりは、利用した方がいいか。
「まあ、そんなことはどうでもいいとして、本題に入りましょうか」
ふと、シェアトが言った。
「本題だと？」
アンク疑念をよそに、シェアトは立ち上がって千代子の手を取った。
「この店、部屋は空いていないかしら」
「部屋？　それなら空いていないこともないけど」
「私たちをここに住まわせてもらえないかしら。もう野宿は嫌なの。家賃？　は分からないけれど・・・・・その分は翼が働くわ」
「え、ええ。別に構わないわよ。映司くんたちも住んでいるし、特に家賃は無いけど」
「そう、ありがとう」

話が一段落したところで、映司が部屋から出てきた。

「千代子さ～ん」

映司は、店の柱を軸にして回りながら千代子に言う。
回転中の映司の腕がアンクを叩きまくっていることに対して、アンクは無反応を決め込んでいる。

「ん？」

「女の人って、年下の男でも大丈夫ですか～」

「え？　ああ・・・・・・お相手って、年上の方？」

その時、映司を追って部屋から泉比奈が出てきた。

「駄目ですよ。千代子さん。映司くん、熱があって」

「分かってる、分かってる・・・・・・大丈夫よ、映司くんは年上にモテるじゃない。お婆ちゃんのファンもついているし」

千代子は映司の手を取って言う。
そのとき、アンクはゆっくりと立ち上がって店の奥に歩いていった。
千代子の手を映司は振り払う。

「優美さんはお婆ちゃんじゃないです！　あ！　・・・・・・モテる人！」

映司は後藤に向かって走っていく。

「プレゼントって何がいいですかね～？　これぐらいのお予算で」
映司がポケットからパンツを出して開こうとしたところで、ハリセンが映司の頭に直撃した。
「目を覚ませぇ！」
ハリセンで映司の頭を叩き続ける後藤を、千代子が押さえる。
そこに、水の入ったバケツを持ったアンクが走ってきた。
「こいつにはこれで十分だ！」
「駄目！」
アンクを比奈が押さえる。
「放せ！　おいお前。おれのこと、何発殴ったんだよ！！」
「あのーー！！」
いつの間にか、扉のところに来ていた伊達が叫んだ。
「後藤ちゃん。取り込み中悪いんだけど、ちょっと手伝って」
後藤はハリセンを取り落として、千代子の方を向く。
「千代子さん。ちょっとすみません。ディナータイムまでには戻りますから」

伊達と後藤はクスクシエを出ていった。

「ヤミー見つけたのか」

「ねえ、アンク。グリードも恋ってする？」

映司がアンクの方に手を置いて言う。
それを振り払い、アンクは持っていたバケツの中の水を映司の顔にぶちまける。それから、映司の頭にバケツをかぶせた。

Ψ

「すっかり逆転ね・・・・・・どう？　気分は」

水族館の中で、佐倉優美はロープで縛られた佐倉麗に向けて言う。

「姉さん。ごめんなさい。お願い、許して」

「謝らないで。私は好きであなたの影にいたの」

「じゃあどうして、こんな・・・・・・」

麗は懇願するようにそう言った。

「さあ？　只、ちょっとあなたみたいにしてみようかなって、そう思っただけだったんだけど・・・・・・何故だか止まらなくなっちゃって。綺麗になるって気持ちいいのね。

皆が注目して、私の言いなりで、このままずっと――」
優美がそう言ったところで、缶を担いだ伊達が歩いてきた。
「止めとけ、佐倉」
「伊達くん・・・・・・」
「目ぇ覚ませよ。こんなのお前らしくない」
「これが私よ。前より断然綺麗でしょ。どうしてあなたは平気なの？　他の人は皆――」
優美の言葉を伊達が遮る。
「そりゃあ・・・・・・昔のお前の方が好きだったからじゃない」
「え？」
伊達は麗のロープを解きながら言う。
「今のお前は俺には一つもよく見えねぇし」
「そんなわけない」
「なぁ、佐倉。一緒にアフリカのサヘルで働いてたとき――」
伊達が麗のロープを解き終える。
「大変だったけど、楽しかったよな。お前、夢中になると他のこと

全部吹っ飛んじまって、でもあん時のお前は綺麗だった。
今のお前は欲望って言う酒に酔っぱらっているだけだ」
伊達がそう言うと、優美は崩れるようにその場に座り込む。
「伊達くん・・・・・・私」
優美は首のティアラを投げ捨てる。
「佐倉・・・・・・」
伊達が優美に歩み寄ろうとしたところで、エイサイヤミーが飛び込んできた。
「欲望を止めるな！」
伊達はエイサイヤミーを押さえる。
「逃げろ！」
「姉さん！」
麗が優美を連れてその場から離れる。
伊達が角を掴んで応戦するが、投げ飛ばされて地面に激突した。
「ぐ・・・・・・は」
伊達に近づこうとするエイサイヤミーに、飛んできたセルメダルが直撃した。奥から、バースバスターを構えた後藤が走ってくる。

「後藤ちゃんナイス！　板に付いてきたじゃない」

「伊達さん。キザな話もいいですけど、まずはヤミーを」

「え、やっぱちょっとキザっぽかった・・・・・。悪ぃ」

伊達はバースドライバーを腰に巻いた。右手でセルメダルを弾き、それを左手で握りしめる。

「変身」

伊達はバースドライバーにセルメダルを投入し、摘みを回す。無骨な機械音が響き渡り、伊達の体を銀と緑の装甲が包み込んだ。

「伊達くん！？」

優美が驚愕の声を上げる。

「後藤ちゃん！　二人のガードよろしく！」

「分かってます」

後藤は優美と麗の元に走っていき、バースはエイサイヤミーに向かった。

Ψ

アンクと比奈が、自分一人では歩けないような状態の映司を引きずり、その後ろを翼とシェアトが歩いていた。

「おい、お前はついてくんな。邪魔だ」

「だって心配なんだもん。こんな映司くん見たことないし」

「大丈夫だって、比奈ちゃん。俺決めたから」

映司は二人を振り払う。

「何を？」

「俺、優美さんにプロポーズする」

何処からともなく取り出した花を手に、映司が言う。

それを見て、比奈はまさしく、開いた口が塞がらないと言うような状態に陥り、アンクは微妙に顔がひきつっている。

「「全然、大丈夫じゃない」」

二人が同時に言う。翼とシェアトはその光景を無表情で眺めていた。

否、二人ともごく僅かにではあるが、顔がひきつっていた。

・・・・・・その時、背後から足音が聞こえてくる。アンクと比奈が振り向いた。

「カザリ・・・・・・」

「僕のヤミー、いい感じに育ってるんだから・・・・・・邪魔しないでよ」

「・・・・・・映司くん！」

比奈が映司を振り向く。

「好き、嫌～い。好き、嫌～い」

映司は花弁を一枚ずつ取って言う。

「「いい加減にしろ（して）！！」」

アンクと比奈が映司を殴り飛ばした。シェアトと翼は飛んできた映司をかわす。

「へへ・・・・・・優美さん。俺の明日のパンツを・・・・・・」

それだけ言って、映司は気を失った。

「きゃああ、やりすぎ！」

「ちょっと、待っとけよ！」

比奈とアンクが映司に走り寄る。

「え・・・・・・ちょ、ちょっと」

戸惑いを隠せないカザリの前に翼が走ってきた。

「やっと出番だな！　今は俺が相手をするぜ。シェアト！」

「ええ！」

シェアトがメダルを投げる。翼はそれを受け取って、アインズドライバーに填め込み

、スキャンする。

「変身！」

ペガサス！　フェンリル！　スフィンクス！

ペ・フ・ス！　ペフス　ペ・フ・ス！

翼の周りをメダルが廻り、翼の姿が仮面ライダーアインズ＜ペフスコンボ＞へと変わり、アインズはカザリに向かって走り出す。

「アインズ！？」

カザリは戦闘態勢を取るが、アインズとカザリの間に猫を模した女性が他の怪人が飛び込んできた。

「え？　アルテル？」

「久しぶりね、カザリ。私はアインズに用があるから、借りていくわ」

アインズを掴んで、アルテルは跳躍した。

「え・・・・・・ちょ・・・・・・・」

完全に取り残されたカザリはため息をついてから、石の上に座り込んだ。

Ψ

比奈とアンクが映司に走り寄った。

「おい、こいつ変身させる。手伝え」

「え？」

アンクが映司の服の中を漁って、オーズドライバーを取り出した。

「オーズなら、ヤミーの毒気を払えるかもしれないんだよ。急げ」

比奈は映司を立たせ、アンクはオーズドライバーを映司の腰に巻き、メダルを入れる。

「変身」

比奈がオースキャナーを滑らせた。

タカ！　トラ！　バッタ！

タ・ト・バ！　タトバ　タ・ト・バ！

映司の姿が仮面ライダーオーズ＜タトバコンボ＞へと変わる。オーズは前のめりに倒れかけ、かろうじて姿勢を保った。

「お・・・・・・おっと！　あれ、何でおれ変身してんの？」

「映司くん、やった！」

比奈が飛び跳ねて喜ぶ。

「・・・・・・あー！　カザリ！　どうなってんの？」

オーズがカザリを見つけて叫ぶ。

「いいから行けよ！」

無防備にカザリの前に出たオーズの頭にカザリの拳がヒットした。

バースはバースドライバーの摘みを回す。

ドリルアーム！

機械音が鳴り響き、展開されるドリルアーム。

「よぉし、行くぜ！」

バースはドリルアームでエイサイヤミーを二、三度殴り、腹部を貫いた。メダルが大量にドリルアームに付着する。

「うおぉ！　後藤ちゃん、缶！」
後藤が急いで缶を用意する。
「おぉぉぉ！？　早く、早く、早く、早く！」
エイサイヤミーは大量にメダルがはぎ取られ、イトマキエイヤミーへと退化し、明後日の方向へ飛んでいく。
バースはドリルアームについたメダルを、缶に向かって投げる。缶から逸れたメダルの数枚が、後藤を直撃した。
「ごめんごめん！
すげえな、パワーアップまでしてるよ・・・・・・さっすが、ドクター」
その時、イトマキエイヤミーは鳴き声が響かせ、壁を突き破る。砕けた壁が四人に降り注いだ。

Ψ

アルテルはアインズを投げ飛ばしてから、着地する。
そこにシェアトが走ってきた。
「シェアト。私のメダル、三枚持ってるんでしょ。渡してくれないかしら」

アルテルが言う。口調はシェアトに近いものではあるが、その声色からか、大人びた印象を与えている。

「嫌よ。あれは私のメダル」

「そう・・・・・・なら、力づくしかないわね」

「分かりやすくていいわね。翼！」

「分かってる！　人の戦いを邪魔した責任は取ってもらうぜ！」

アインズがアルテルに向かって、走り出す。

「遅いわよ」

アルテルの姿が消えた。

「ぐっ・・・・・・は・・・・・・・・」

アインズが吹き飛び、壁に激突する。その壁が崩壊し、アインズは瓦礫の下に消えた。

「瞬速・・・・・・・・・・・・・・・・・・流石ね、アルテル」

「私に勝てるとでも思っていたのかしら？　さてと、私のコアを返してもらいましょうか」

「お前こそ、俺に勝てると思っているのか。そんな軽い攻撃、全然効かねぇぜ！」

瓦礫が飛び散り、アインズが現れる。

「あら？　まだ生きていたの。なら、次は確実に止めを刺すわ」

「くそっ、このままじゃ勝てない・・・・・・シェアト！　メダル！　オレンジを二枚！」

「また勝手なことを！　・・・・・・いや、ここを切り抜けるにはそれしか。仕方がないわね。使いなさい！！」

シェアトが橙のメダルを二枚投げつけ、それを受け取ってアインズはアインズドライバーに納めた。
アインスキャナーが走る。

ケルベロス！　フェンリル！　ヘルハウンド！

ケール、リンド！　ケールリンード！！

アインズの姿が変わった。
頭には三頭の犬が噛みつき、両腕、両足からは大量に漆黒の鎖が伸びている。

「はあぁぁぁぁあああああああああああああ」

アインズを中心に突風が起き、アインズの身体中に風をあしらった紋様が現れる。

「コンボね・・・・・・でも、それで勝ったつもり？」

再びアルテルの姿が消え、アインズに向けて雷が走る。

「な・・・・・・風で私の動きを」

風の中に入った途端、アルテルの姿が再び現れた。

「見える、俺にも敵が見える！」

鎖でアルテルに殴りかかる。

「な・・・・・・・・嘗めるなぁ！」

アルテルが激昂した。そこには大人びた印象を醸し出していたアルテルの姿はない。

そこにいたのは怒れる獅子。翼たちは最早、後には引けない。眠れる獅子を起こしてしまったのだから。

アルテルの両腕に爪が現れ、鎖と交錯する。鈍い音が鳴り響いた。

「しぶといわね、でもコンボなら・・・・・・・・・・・・・・翼！アルテルを倒しなさい！　メダルが一気に増えるわ！」

「合点承知！　これで決めるぜ！」

アインズはメダルをスキャンする。

スキャニングチャージ！！

アインズの両腕、両足の鎖が外れ、周囲に散乱した。その鎖が、風で加速し、風に乗ってアインズは空中に浮き上がる。

「これで終わりだぁぁぁあああああああ！！」

すべての鎖がアルテルに向かい、アインズが蹴りを放つ。

「・・・・・・勝ったわね」

シェアトが呟いた。

「私が負ける・・・・・・そんなこと、あり得ない。あり得ない！！」

アルテルの叫びと同時に、アルテルの身体の中でコアメダルが躍動を始める。両の爪が邪々しく変貌し、アルテルの身体が緑色の輝きを放った。

「ＧａＡＡ」

――轟。

アルテルの姿が消え、稲妻が走る。

刹那――全ての鎖は力を失って地に落ち、荒々しく吹き荒れていた風が消し飛んだ。

「そ、んな・・・・・・うそ・・・・・・！？」

シェアトは驚愕を隠しきれずに、途切れ途切れに言う。

「う・・・・・・くっ・・・・・・」

アインズは弾き飛ばされて地面に激突。変身が解かれ、翼は膝をつ

いた。

「あぁ・・・・・・・・・・・・・・・くぅ・・・・・・・・」

アルテルの姿が再び現れたかと思うと、アルテルの身体を覆っていた緑の鎧が全て音を立てて砕け散る。

「・・・・・・・！？　アルテル、あなたまさか！」

シェアトが驚きを隠せずに言う。

「あなたの思っている通りよ。核活性（コアブースト）を使ったわ・・・・・・・・・・・・・」

既にアルテルの口調が元に戻っていた。

「そう・・・・・・あれを使った後では、戦えないでしょ。退いてくれない？」

「分かったわ」

そう言い残して、アルテルは跳躍する。

「悪ぃ。勝てなかった・・・・・・」

翼が言う。

「別にいいわ」

シェアトがそう言ったのと同時に、翼はその場に倒れ込んだ。

「はは、身体動かねぇ」
翼は空を仰いで、悔しそうに笑った。。

Ψ

カザリは爪でオーズを切り裂き、オーズはその爪を蹴る。
その時、何かの鳴き声が聞こえ、水族館の中からイトマキエイヤミーが飛び出した。

「僕のヤミーとは思えないな」

「カザリの奴、また面倒な物を・・・・・・」

「さて、僕のメダル、貰おうか」

カザリは右腕から水流を放ち、オーズを吹き飛ばす。オーズは体制を立て直し、カザリに向かう。オーズをカザリが爪で切り裂く。

「くそっ、何か手は・・・・・・？」

そこまで言ったところで、アンクは発案して、メダルホルダーを開いた。青いメダルを指でなぞってから、右腕を飛ばす。泉信吾の身体が力を失って倒れ、それを比奈が受け止めた。
オーズを切り裂いていたカザリを殴ってから、オーズに近づく。

「映司！　タカの目でカザリの中を探せ！　狙うメダルは――」

「何こそこそやってんの」
カザリがオーズに向い、爪を降りかぶる。それをオーズが回避した。
「分かった。やってみる！」
「何か企んでる？　無駄だと、思うけど」
その時、水中からイトマキエイヤミーが現れ、頭から光線を放つ。
その光線が水族館に直撃する。
ガザリとオーズが交戦し、アンクがイトマキエイヤミーを翻弄。
「こっちだ」
アンクに挑発されたイトマキエイヤミーの放った光線が、戦闘中のカザリとオーズに直撃した。
「映司！　今だ！」
「分かった」
オーズは爪を展開し、カザリの放った水流を避け、そのままカザリの腹部を貫き、タカの目がカザリの中を駆け巡る。
「これだっ！」
オーズが爪を引き抜くと、そこに青いメダルが引っかかっていた。
「やった！」

「映司！　このコンボだ！」
アンクが青いメダルを二枚投げつける。
「狙いはそれか……なるほどね」
「僕のメダル……預けとく」
カザリは逃げ出す。
オーズはメダルを受け取ってオーズドライバーに納めた。三枚のメダルが共鳴して、光輝く。
オースキャナーが走った。

シャチ！　ウナギ！　タコ！

シャ・シャ・シャウタ！　シャ・シャ・シャ・シャウタ！

オーズの姿が変わる。
鯱を模した頭部に、鰻の腕、蛸の脚を持つ、青き水生の姿＜シャウタコンボ＞へと。
アンクは泉信吾の身体に戻って、立ち上がる。
「凄い……」
比奈が言った。
その時、水中からイトマキエイヤミーが現れ、オーズに突進した。
オーズは液体化して、それを避け、水中に潜ったイトマキエイヤミーを追う。
イトマキエイヤミーが深く潜っていくのをオーズはしつこく追い続

ける。
逃げ切れないと悟ったのか、イトマキエイヤミーは方向転換し、オーズに向かっていく。
接触する直前で、オーズはそれを回避して、再度イトマキエイヤミーを追う。
一方のイトマキエイヤミーは、水中で停止し、大量に作り出した鉄球を投げつけた。

――撃。

オーズはそれらに突撃して、全ての鉄球を破壊し、イトマキエイヤミーと対峙。
オーズは脚に力を入れ、八本の蛸脚が展開される。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ」

オーズの脚とイトマキエイヤミーの腕――合わせて二十を越えているであろうと思われる――が激突した。

「はああぁ！！」

オーズは、イトマキエイヤミーの腕を絡めとるようにして破壊した。
砕けた腕がメダルとなり、水中に沈む。イトマキエイヤミーは悲鳴を上げて逃げ出した。

その背中にオーズが脚の吸盤で張り付く。
そのままイトマキエイヤミーとオーズは水中から飛び出した。イトマキエイヤミーが暴れまわり、地面に激突。
その直前にオーズはイトマキエイヤミーから離れ、着地する。

それからオースキャナーを腰から外し、メダルをスキャンした。

　スキャニングチャージ！

オーズの目が輝き、液体化して飛び上がる。

鰻の鞭を伸ばして、イトマキエイヤミーを固定して、引き寄せる。

オーズの蛸脚が再び展開し、渦巻く螺旋へと変わる。

「せいやぁぁぁあああああああああああ！！」

オーズに貫かれ、メダルを撒き散らして、イトマキエイヤミーは爆散した。

砕けた水族館の壁の破片によって怪我をし、伊達による応急処置を受けた佐倉優美が担架で救急車へと運ばれる。

「姉さん、もう大丈夫だからね」

佐倉麗が優美に話し掛ける。

「伊達くん……ありがとう」

「おうっ」

「あのね、私がちょっと綺麗になりたいって思っちゃったのはね——」

「止めとけって。古い酒は悪酔いしちまうぞ……なっ」
伊達は優美の言葉を遮った。
「そっか……そうだね。分かった」
救急隊員が優美を救急車に乗せる。
「ありがとうございました」
伊達に一礼してから、麗は救急車に乗る。救急車のトランクが閉じられた。
「いいんですか？　彼女、伊達さんのこと……」
後藤が言う。
「俺、今手一杯だから。こんだけ稼ぐのに」
伊達は人差し指を立てて言った。

「映司くんの好みの女性、ああいう感じだったんですね」
「ああいう感じって……何それ？」
映治は不思議そうに言う。
「お前、何も覚えてないのか。たくっ、めでたい奴だな」

「何だよ……比奈ちゃん！　俺、何か言った？」

「まあ、恋愛相談をちょっと」

比奈が微笑んで言う。

「ちょっ……ちょっと！　詳しく教えてよ。ねぇ！」

「教えな～い」

逃げる比奈を映司が追いかけた。

オーズの使えるメダル

タカ　2
クジャク　1
コンドル　！
バッタ　1
トラ　1
ゴリラ　1
シャチ　1
ウナギ　1
タコ　1

アインズの使えるメダル

ペガサス	1
バステト	1
ネフェルティ	1
スフィンクス	1
ケルベロス	1
フェンリル	1
ヘルハウンド	1
???	1
???	1

長期休載のお知らせ

以前に活動報告にも書かせていただきましたが、今回の投稿をもちまして仮面ライダーアインズは一時長期休載となります。

休載の理由は大学受験なので、いつ戻って来られるかは定かではありません。

少しでも早く、全て振り切って戻って来たいとは思っています。

第八話の次回予告は、投稿再開の目処がたった時に、第七話の後書きに入れます。

それでは、親愛なる読者の皆様、それまでお元気で。

これからも、仮面ライダーアインズと無音Ψ無心を何卒よろしくお願いいたします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7301q/

仮面ライダーOOO（アインズ）

2011年10月6日06時17分発行